幼児期の語彙及び音韻意識の獲得状況と小学校１年生における「読み」の力の調査結果との関連性

A 県 B 市 C 保育園・D 小学校における追跡調査の実践から

大島　光代
（名古屋学芸大学ヒューマンケア学部）

KEY WORDS: 音韻意識、語彙、「読み」の力

１　はじめに

音韻意識の獲得の重要性は、聴覚障害児においても発達障害児にも共通して認識されるようになった。子どもが正しく読み書きができるようになるためには、文字表記と音韻の対応規則を理解しなければならないことに加え、連続的に表現される話しことばを音節や音素単位で文節的にとらえ、その音韻的側面を分析できる能力が必要となる（長南・斉藤，2007）[1)]。

音韻意識とは、天野(1998）[2)]によれば、「音韻分析は母国語の語音（音韻）の抽象という新しい知的な試行行為を基礎とする」とした上で「そうできるためには、語に含まれている音を分離・抽出する思考行為を獲得することが必要で、そうしてはじめて、語に含まれる音韻、音節を同定することができる。またその結果として、母国語の語音の表象（音韻）が形成され、語の音韻構成について明確な意識（自覚）をもつことができる」と述べている。天野（1970）[3)] は、健常幼児を対象として、音韻意識の獲得状況を測るものの中では、最も早く可能となるといわれる音韻分解課題を実施した結果、日本語の基本的音節を音節分解できる年齢は概ね４歳半であることを示した。

２　目的

大島（2017）[4)] は、平成 27 年度、A県B市C園の年長児を対象とする語彙と音韻意識の獲得状況を調査した（5 月～8 月）。その結果をもとに、園長・主任・担任に対し、語彙と音韻意識の獲得が十分とは言えない幼児に対しては、今後意識的なかかわりをとおして言語発達を促すことを提案した。就学後の言語力は、教科学習の基礎を支える。小林（2016）[5)] は、早期にことばの発達に遅れのある子どもの言語学習困難を見つけることは不可能ではないとした。

本研究では、小学校１年生となったC園の元年長児に対し、言語力調査を行うことにより、早期の言語力が教科学習の基礎となる「読み」の力に及ぼす影響、読み困難児の早期発見の可能性について考察することを目的とする。

３　方法

C園年長児の際に実施した言語力調査（大島，2017）[4)] とD小学校１年時に実施した言語力調査の結果を比較する。

１）対象
　A 県 B 市立 D 小学校１年生（C 園卒園生）29 名

２）実施日
　平成 28 年 10 月 X 日

３）調査内容
　数研式　読書力診断検査（全国標準）：図書文化社

４　結果

C園で実施した言語力調査で要注意と判断し、今後のかかわりについてアドバイスを行った幼児８名は、クラスの平均正答率と比較して明らかに正答率が低い状況がみられた。その８名の小学校１年生時における調査結果を以下の表にまとめた（表１）。表内の段階は、読書力診断検査の結果から判定される 1～5 段階まであり、1（劣る）、2（やや劣る）、3（普通程度）、4（優れている）、5（とても優れている）と解釈する。また年長時に「読める文字が少ない」状況が認められた場合、年長時得点蘭に網掛けを施した。

表１　年長時の言語力調査結果と小１時の言語力調査結果

幼児・児童	性別	年長時得点（偏差値）	小１時得点（偏差値）	段階
A	男	41	29	1
B	男	45	32	1
C	男	34	32	1
D	男	40	32	1
E	男	43	41	2
F	男	36	45	3
G	男	30	33	1
H	女	39	34	1

C 園での年長児の時期（8 月）の時点で、語彙及び音韻意識の獲得状況に遅れが見受けられる８名のうち、小学校 1 年生の 10 月の時点で言語力の段階が１と判定された者は６名（75%）、２と判定された者は１名（12.5%）、「読み」の力が「劣る」「やや劣る」者は 87.5%を占めた。

５　考察

年長児に実施した言語力調査に用いた絵カードは、「清音」「濁音・半濁音」「撥音」「促音」「拗音」「拗長音」の音韻に対応したことば 184 語である。その 65%は小学の国語の教科書（光村図書）で使用されることばから選択した。残りの 35%は幼児教育施設（保育園・幼稚園等）で身近に接するものや食べ物、植物、動物や身体の様子などのことばと、少し難解なことばも含めた（大島，2017）[4)]。

この調査からは、極端に語彙が少ない幼児や語彙は豊かであっても音韻分解が困難な幼児、文字（平仮名）が読めない幼児を見出すことができる。年長児の８月頃であれば、平仮名には興味をもち読める文字が増えている幼児が多い。全く興味関心が無く、文字が読めない幼児は、認知の面の課題をもつことが多く、就学までに適切な支援を行う必要がある。今回の調査により、「読み」を困難にする要因として、語彙及び音韻意識獲得の不十分さが影響することが示唆された。さらに、文字が読めない実態との関連性がうかがえる。また、小林（2016）[5)] の言語学習困難児の就学前の早期発見が可能であるという主張の正しさも示唆された。

【引用文献】

1)長南浩人･斉藤佐和（2007）人工内耳を装用した聴覚障害児の音韻意識の発達，特殊教育学研究，44(5)，283－290
2）天野清（1998）音韻分析と子どものLiteracyの習得」.『教育心理学年報』，27，142－164
3)天野清（1970）語の音韻構造の分析行為の形成とかな文字の読みの学習，教育心理学研究，18(2)，76－89
4)大島光代（2017）健常幼児と障がい幼児の語彙及び音韻意識獲得の特徴，教科開発学論集，5，53－63
5)小林マヤ（2016）学習に困難をもつ子どもにとっての英語学習，こころの科学 187，日本評論社，53－57

MITSUYO　Ohshima